

アカデミア

文学・語学編 (70)

論文

- 日本語における述語と時制要素の膠着について…………… 青柳 宏…(1)
- Defining A Learner-Centred Approach …………… Robert CROKER…(31)
- 「の」であらわされる文法範疇の獲得：実証的研究 …………… 橋本 和子…(55)
村杉 恵子
- Is It Possible to Combine Reading and Oral Communication? —Reading
Aloud in an Expository Reading Class …………… Mariko KUBO-HOLLAND…(89)
- Ngugi and the Church …………… William F. PURCELL…(119)
- The Japanese Particles 'kara' and 'made' …………… Tsuyoshi SASAKI…(145)
- Exceptional Passive and the Structure of ACC-ING …………… Tatsuya SUZUKI…(157)
- Integrating Language Learning and Teaching with the Construction
of Computer Learner Corpora …………… Duane KINDT…(177)
Mark WRIGHT

研究ノート

- Survey of Students' Opinions on Acquiring Business English
…………… Yukiji HACHISUKA…(209)
- 「17世紀書写コンカニ語・ポルトガル語辞書」タイプ版覚書 …………… 丸山 徹…(219)
-

2001年6月

南 山 大 学

「の」であらわされる文法範疇の獲得：実証的研究

橋本 知子
村杉 恵子

Abstract

This study constitutes a longitudinal observation of a Japanese-speaking child's acquisition of "no" in different syntactic categories (Noun, Genitive Case marker, and Complementizer). The findings revealed that the different categories are acquired in the following order: (i) "the Independent Genitive Form" (e.g., John-no (John's)), (ii) the Noun (e.g., akai-no (the red one)), and (iii) NP with the Genitive Case marker and the lexical head (e.g., John-no hon (John's book)). Furthermore, this study shows that there are two distinct phenomena concerning the overgeneration of "no", and the two types may take place within the same child: the first overgeneration appears just after (ii), and the second after (iii). Crucially, the second overgeneration is observed just at the time when the tense and the Nominative Case assignment are acquired. In acquisition studies, three hypotheses have been proposed regarding the syntactic status of the overgenerated "no": "no" as Genitive Case marker (Ito 1993), "no" as Noun (Nagano 1960), and "no" as Complementizer (Murasugi 1991). This study suggests that the first overgenerated "no" is the Noun, and the second, the Complementizer, thereby providing supporting evidence for both the Noun hypothesis and the Complementizer hypothesis.

1. はじめに

人間が後天的に学習したとは考えにくい言語知識の一つに、文法範疇がある。統語的な範疇には機能範疇と語彙範疇がある。例えば(1a)及び(1b)において that は Complementizer (C), (1c)における 's は(1d)における that と同様に Determiner (D)であり、いずれも機能範疇と考えられている。(1a), (1b)及び(1d)に示す that のように、同じ音形をもった語が Determiner と Complementizer という別の範疇として機能することもある。

- (1) a. the turkey that Mary cooked for John
 b. I think that John is smart
 c. John's book
 d. that book

一方、(1)における turkey や book は名詞 ((N)oun), cook や think は動詞 ((V)erb), for は前置詞 ((P)reposition), そして、smart は形容詞 ((A)djective) である。これらは語彙範疇と称される。

日本語においても、異なる文法範疇が同一の音声表示をもってあらわれることがある。(2)から(4)に示すように、語彙範疇である(代)名詞(N)と、属格や補文標識(C)といった機能範疇が、東京方言においては「の」という同一の音声をもってあらわれる(Murasugi 1991)。

(2) 代名詞の「の」

- a. 赤いの (赤いもの, 赤いやつ, の意味)
 b. 母から届いたの (母から届いたもの, の意味)

- (3) 属格の「の」
 a. 僕の本
 b. 野蛮人の侵入
 c. 都市の破壊
 d. 雨の日
 e. 木の上
 f. 母からの贈り物

(4) 補文標識(C)

- a. ロブスターをたべたのは、ボストンでだ
 b. メルを飼っているのは斎藤さんだ

日本語の文法獲得の初期段階に、(5)や(6)のような「の」の誤用が観察されることは広く知られている(永野 1960; 大久保 1967; 岩淵他 1968; Clancy 1985)。(*は、当該の文あるいは要素が非文法的であることを示す。)

- (5) a. きいろい*の はな
 b. ほわし おおきい*の ほわし (永野 1960, 411) (2;1)

この種の「の」の過剰生成に関する実証的な先行研究は多い。それらを詳細に調査すると、他の文法項目の過剰生成に比べて、「の」の過剰生成の時期は広範囲にわたっており、言語獲得の初期のみならず、遅くは5歳前後という後期になっても観察されることがわかる。Murasugi (1991)は、被験者「えみちゃん」において、2;11-4;2に(6)~(7)のような「の」の過剰生成が観察されたことを報告している。

- (6) a. 走ってる*のバーバー
 b. お外の食べてん*の象さん
 c. 踊ってる*のシンデレラ
 d. トウモロコシ食べてる*の豚さん
 e. お洋服着替えてる*のバーバー
 f. エミちゃんの書いた*のシンデレラ
 g. 怪獣の食べた*のゴリラ
 h. ママ作った*のシュークリーム
 i. パパが書いた*のタコの絵
 j. あそこのドアの閉まった*の音
 k. シュークリーム作ってん*の匂い (Murasugi 1991)
- (7) a. ちがう*のおうち
 b. 赤い*の帽子
 c. すっぱい*のジュース
 d. かわいい*の象さん
 e. おおきい*のタコ
 f. ちっちゃい*のタコ
 g. あたらしい*のおうち (Murasugi 1991)

(5)~(7)の「間違っ」挿入された「の」は、(2)から(4)のどの文法範疇に属するものなのか。これについての分析には、1990年までに大きく2つの仮説が提案されている。過剰生成される「の」が(3)の属格であるとする説(Clancy 1985; 横山 1990 等)と、(2)の(代)名詞であるとする仮説(永野 1960)である。一方、Murasugi (1991)では、中期から後期の年齢の被験者を対象とした実証研究に基づき、(6)~(7)のように過剰生成された「の」は(4)の補文標識であるとする仮説を提示している。

Murasugi (1991)に対しては、その後、幾つかの批判論文が発表されている。例えば、伊藤 (1993) は、過剰生成の「の」が補文標識であるのならば、「形容詞+の」は関係節であり、時制を含む本来の関係節構造を産出できる時期と、過剰生成の「の」を含む発話が出現する時期とが重なることを予測するが、伊藤の被験者のデータにはそういう事実は見られないとする。

本研究は、(5)~(7)で示す過剰生成された「の」の文法範疇が何であるかを解明することを目標とした上で、異なる文法範疇の「の」-属格、名詞、補文標識-は、いつ、どのように獲得され、過剰生成は、いつ、どのようにおきるのかについて考察を行なう。日本語を母語とする幼児1名(「あっくん」(1997年6月生まれ))を対象とする三年間の縦断的観察・実験研究に基づき、異なる範疇の「の」の獲得時期と過剰生成の「の」のあらわれる時期との関連について、理論的実証的研究を行なう。

その第一回目の研究報告として、過剰生成された「の」の文法範疇と理論的意義について考える前に、本稿では、その前提となる実証研究を報告する。2節では、永野 (1960) が既に観察しているように、異なる統語範疇の「の」が、以下のような順序で獲得され、(5)のタイプの初期の「の」過剰生成は、(8b)と同時期に始まることを示す。

- (8) a. 所有の意味をもつ「名詞句の独立属格形」の「の」
 (e.g., あっくんの)
 b. 代名詞(N)としての「の」(e.g., あかいの)
 c. 「名詞句の属格形+名詞」構文における属格「の」
 (e.g., あっくんのしゅっぱっぱ, 木の上)

3節では、横山 (1990)、村杉 (1998) で示唆されるように、「の」の過剰生成の時期が、2期存在する可能性を指摘する。「の」の獲得の第三段階として、2;6に(8c)のような「名詞句の属格形+名詞」の形で(所有の)属格「の」が

あらわれるが、2:6 から 2:9 にかけて、属格挿入は（特に、修飾句と名詞の間で）過小生成される。そして、属格「の」の挿入規則が過小適用される時期に、(6)～(7)のタイプの（第2期の）過剰生成が始まる。このときの過剰生成の特徴として、（時制をもつ）関係節を含む複合名詞句において「の」が過剰生成され、また、その時期が文内で時制や「が」格があらわれる時期と一致することを報告する。

本研究は、縦断的自然発話観察、実験による発話引き出し(elicited production)、及びくり返しによる引き出し(repetition task)により収集されたデータに基づくものである。

2. 「の」の獲得順序と初期の「の」の過剰生成

永野(1960)は、日本語を母語とする被験者2名を対象に縦断的観察研究を行い、そのうち、女兒1名について、2:1に準体助詞の「の」が頻出し、2:2の時点で、格助詞の「の」が正しく使われるようになったと報告している。(9)及び(10)がそれぞれの発話例である。

- (9) a. おおきいの
b. ちっちゃいの
c. これ、あかいの (永野 1960, 410)
- (10) a. セーター、あむなの。あむなの セーター。あむなの セーター
b. パパの ぶとん
c. なに いれる？ ようちえんの たまご？ (永野 1960, 412)

そして、永野は、(11)に示すように、(本稿で述べるところの第1期の)「の」の過剰生成が観察された時期は、(10)の発話が観察される1ヶ月前の2:1の

時点であることを指摘する。更に、過剰生成の「の」の出現時期が、(10)に示すような格助詞の習得に1ヶ月先行していることから、(11)のような過剰生成は準体助詞の「の」からの類推によってひき起こされると分析する。すなわち、永野の分析によれば、過剰生成されている「の」は準体助詞（本稿で述べるところの代名詞(N)としての「の」）である。

- (11) a. きいろい*の はな
b. ほわし おおきい*の ほわし
c. あむな ちっちゃい*の あむな (永野 1960, 411)

本節では、初期の「の」の過剰生成がはじまる時期について、永野(1960)の観察結果を実証的に裏付ける。本研究の被験者「あっくん」の「の」の獲得過程を基に、異なる文法範疇の「の」の獲得段階と過剰生成のあらわれる時期との関連について観察事実を報告し、それぞれの獲得段階での文法的特徴について考察する。

2.1 永野(1960)の検証 (1): 所有の「の」のパラドックス

本小節では、「の」の獲得において、所有の意味をもつ「の」が最初に獲得されることを示す。その時点では、「名詞句の独立属格形」の「の」(e.g., あっくんの)は観察されるが、「名詞句の属格形+名詞」の構造における項に付与される属格「の」はあらわれず(e.g., あっくん ぶどうぶ), その意味で、「非対称的」な獲得段階と捉えることができる。以下にみるように、この現象は、英語の文法獲得の初期段階にもみられるものである。

本研究の被験者の「の」の獲得の第一段階は、(12)に示すように、所有の意味をもつ「の」である。

- (12) a. あっくん, の (2;3)
 b. こえ, あっくん, の (=これは, あっくんの物だ) (2;3)
 c. こえ, まま, の (=これは, ママの物だ) (2;3)

英語において、属格 's の初出が、所有の意味を担う 's であることはよく知られている。古くは Cazden (1968)が(13)を例に指摘するように、英語の獲得の初期段階において、同一の子供が「名詞の独立属格形」では 's を産出するが、「名詞句の属格形+名詞」では常に 's を省略する。

- (13) Mummy's. Mummy key. (母親の鍵をもって) (Gia, 1;8)

日本語の母語獲得においても、多様な「の」の中で、はじめに獲得されるのは、所有の意味をもつ「の」である。日本語を母語とする本被験者の場合、自然発話に現れたのは2;3の時期である。(Mは母親、Cは子供を示す。また、データ中の「,」はポーズをあらわす。)

- (14) M: これ, 誰の牛乳?
 C: あっくん, の (2;3)

この時期、英語の母語話者の幼児と同様に、非対称的な「の」のパラダイムが自然発話において観察される。所有の「の」は2;3に初出して以来、頻出するが、2;3から2;5の3ヶ月間、Cazden (1968)の述べる「名詞の独立属格形」にあたる「の」があらわれる一方で、(15b)に示すように、「名詞句の属格形+名詞」において、常に「の」が省略される。

- (15) a. あっくん, の
 b. あっくん, おふとん (2;3)

このことは、所有の意味での「NP の」と「NP ϕ N」との共存の時期が、日本語話者の言語獲得の一段階にあることを示している。

「名詞句の属格形+名詞」で常に「の」が省略されることは実験的にも裏付けられる。repetition taskの手法により、実験者が被験者(あっくん)に「の」を含む名詞句を繰り返させた結果、(16)に示すように、「の」を(一貫して)脱落させる。

- (16) M: あっくん, 「あっくん, のお, パンツ」って言って
 C: あっくん, ばんちゅ (=あっくんのパンツ) (2;3)
 M: あっくん, のお, パンツ
 C: あっくん, ばんちゅ
 M: あっくん, のお, パンツ
 C: あっくん, ばんちゅ

(16)の発話がひきだされたのと同時期に、同様の実験(repetition task)を「名詞の独立属格形」に関して行なった結果、(17)に示すように、「の」は大人と同じ形で産出された。(Fは父親(実験者)を示す。)

- (17) F: あっくん, の
 C: あっくん, の (=あっくんのもの) (2;3)

この時期のパラドキシカルな英語の 's の獲得について、Radford (1990)は、興味深い分析を提示している。初期の文法獲得段階では、幼児の仮定する文法構造は大人とは異なり、機能範疇をもたないと提案するのである。そして、問題となる 's に関する奇妙な現象について、この時期の幼児の 's は、大人の文法と同じ Determiner ではなく、文法機能が異なる形態素であり、そ

れは、pro N'か、もしくは（所有をあらわす叙述的な形容詞に、名詞を交換させる）派生接尾辞である可能性を指摘している。

では、それに相対する日本語の例はどのように分析されるのか。[NP の]における「の」は、属格か pro N'—代名詞か。日本語の大人の文法分析において、奥津(1974)の指摘するように、(17)のような[NP の]という名詞句は、[NP のの]という基底構造をもつが、PF-レベルの消去規則により、属格の「の」が消去され、[NP の]が派生されると考えることもできる。この仮説が正しければ、問題となる段階は、幼児が機能範疇（属格を含む）をもたない段階であるとする Radford (1990)の仮説と、日本語の言語獲得データとは、矛盾するものではない。

しかしながら、一方で、本稿の冒頭で述べたように文法範疇は後天的に獲得されうるものとは考えにくい。この点で、Radford (1990)の、文法獲得の初期段階では機能範疇がないとする分析は、その理由が幼児の言語使用や言語産出における言語発達段階（すなわち言語知識外の問題）に起因しない限り、深刻な潜在的問題を含む。

2.2 永野(1960)の検証 (2): 第1期「の」過剰生成

この小節では、永野(1960)の観察結果が、少なくとも第1期の過剰生成が始まるまでの「の」の獲得順序に関して、本研究においても実証的に裏付けられることを報告する。

2.2.1 代名詞の「の」の獲得

本研究の被験者の「の」の獲得の第二段階は、代名詞(N)の「の」である。2.1で例証したパラドクシカルな「の」は、2;3から2;5の3ヶ月間続くが、2;3の終わりに、所有の意味をもつ「名詞句の独立属格形」の「の」以外の「の」があらわれる。それは、(18)及び(19)に示すような形容詞に修飾される代名

詞(N)である。被験者が初めて所有物以外の意味を表す「の」を含む文を発話したのは(18)の例で、(14)の所有の「の」が現れてから3週間後のことであった。

(18) あかい、の、あった (=赤いのがあった) (2;3)

(19) a. ちいちゃい、の (=小さいやつ) (2;4)

b. まま、おっきい、の、じゃあ (2;5)

(=ママが大量のお湯をジャーと浴びせかけた)

c. こわい、の、ばあ (=怖い物が、少しでも顔を出している) (2;5)

d. あっくん、こえ、みたい、きえい、の (2;6)

(=あっくんはこれが見たい、綺麗な花が咲く種を)

これらの例では、「の」は明らかに外界の対象物をさしており、その「の」は形容詞に修飾された代名詞(N)の「の」であると考えられる。2;4以降、「形容詞+の」という型の名詞的「の」は、多く観察される。

(19)は、名詞としての「の」の指示する対象が直示的に外界に存在することを示しており、大人の用法と同じものと考えられる。これ以外に(20)に示すように、大人とは異なった用法も同時期にみられる。

(20) こえ、ごっちゃん、の (=これは、一度、御馳走様をした物だ) (2;3)

(20)の発話が観察されたコンテキストは以下のとおりである。被験者が満腹の様子だったため、母親は被験者の食事用エプロンを外したが、再び被験者がお代わりを欲しがったため、母親が外した食事用エプロンを着せようとした。すると、被験者はその食事用エプロンをはぎ取り床に放り投げ、(20)を産出した。食事が終わった時点で母親が取り外した(幼児用)テーブルを、

再度取り付けようとした時にも、2度、(20)の発話を繰り返している。このコンテキストで、(20)は、「ごちそうさまをした結果、そこにあるもの」という意味の名詞句か、もしくは広義の所有の意味であると解釈される。

(21)は、2;3の時点で「袋」という語を習得していない被験者が、名詞としての「の」を代用する例である。

(21) こえ、あわあわ、の (=これは、泡の出る入浴剤の袋だ) (2;3)

被験者は、泡の出る錠剤タイプの入浴剤のことを「あわあわ」と称するが、(21)は、未開封の入浴剤の袋を被験者が手にしつつ発話したものである。「私は、この袋の中に泡が出る入浴剤が入っていることを知っている」という意味で「こえ、あわあわ、の」と発話したと解釈される。

このように、2;3終わりから2;4にかけて、名詞としての「の」と考えられる例が幾つか観察され、月齢が進むに連れて、大人と同じ用法の発話が観察される。

2.2.2 第1期「の」過剰生成と属格挿入規則

永野(1960)の観察結果と同様、本研究でも(18)~(21)の代名詞の「の」があらわれた後、(22)に示すような「の」の過剰生成が観察された。この(第1期の)過剰生成は、代名詞の「の」(形容詞+名詞「の」)を含む(18a)の発話が観察されてから約1週間後の2;4にあらわれる。

(22) a. あっくん、ちいちゃい、*の、こんこんこん (2;4)

(=あっくんの小さい(やつ)、コンコンするやつ)

b. まま、おおきい、*の、ぼおち (2;4)

(=ママは、大きい帽子をかぶっていた)

(22a)の発話が観察された状況は次の通りである。被験者(あっくん)が自分のおもちゃの金槌を探しながら、「こんこんこん、ない」と言った。「金槌」は、「こんこんこん」として被験者の語彙にあらわれる。)次に、それが、父親がよく使う本物の大きい金槌とは異なるという意味で、「あっくん、ちいちゃいの、こんこんこん」と発話している。母親が確認するために、「あっくんのちいちゃいの？」と尋ねたら、「ふん、ちいちゃい、の」と答えた。横山(1990)は、永野(1960)説を批判する根拠として、永野説が正しければ、過剰生成の「の」の後に「息の断絶があるはずである。しかし、そのような事実はこれまで報告されていない」(1960, 3)と述べるが、本研究では、その位置でのポーズが、事実として観察されている。そして、「ちいちゃい」と「の」とのポーズの間隔は短く、むしろ、「の」と後続する名詞句との間のポーズの方が長い。

(22b)の発話のコンテキストは、以下のとおりである。被験者の小さな帽子と母親の大きな帽子が棚に置いてあるのを見つつ、被験者と母親との間で、(23)のようなやりとりが交わされた。

(23) C: こえ、ちいちゃい、ぼおち (2;4)

(=この小さい帽子をかぶっていた)

M: そうだね、小さいの、かぶってたね

C: まま、おおきい、*の、ぼおち (2;4)

(=ママは、大きいのを、帽子をかぶっていた)

(22)と(23)につけられた括弧内に記された対応する大人の文は、これらの発話が観察された当時に記録されたものである。

(22)のようなポーズを伴った(第1期の)「の」の過剰生成は、修飾句が、(時制が現在形である)形容詞の場合のみに見られ、かつ、語彙的に限られた形容詞に起こることが特徴である。2;4から2;5の間に観察された過剰生成の

「の」を含む発話で、問題となる形容詞は「おおきい」か「ちいちゃい」のみで、「赤い」や「甘い」などの形容詞は限定的形容詞の形では観察されなかった。2;6において、「甘い」「赤い」「違う」などが限定的形容詞として増えるものの、その時点でも形容詞の数は限られ、活用についても、一つの語彙(形容詞)について一つの形式(現在形)のみが用いられる。

ここで、(22)のような過剰生成がみられる前段階について、簡単に触れておこう。被験者は、2語文段階の1;9で叙事的形容詞を(24)のように発話している。

- (24) a. ぼんぼん、いたっ (=お腹がかゆい) (1;9)
 b. ばあたん、おっきい (=おばあちゃんは大きい) (1;9)
 c. もんも、ちゅっぱあい (=この果物は酸っぱい) (1;11)

また、問題となる限定的形容詞を含む発話は、2;0の段階では「(一見、大人の用法と同じ)正しい形」としてあらわれる。(25)のような限定的形容詞を含む発話が初めて観察されたのは、2;0である。

- (25) a. おっきい、とあつく (=大きいトラック) (2;0)
 b. あかい、ちょおちん (=赤い提灯) (2;1)
 c. ちっちゃい、ぼおゆ、ない (=小さいボールがない) (2;2)
 d. あっくん、ちいちゃい、くちゅ、ないない (2;3)
 (=あっくんの小さいサンダルは、片づけてある)

2;0から2;3には(25)のような「正用」のみが観察されるが、その後、2;4に、問題の(22)の過剰生成がみられるのである。

更に、(22)の過剰生成の時期の重要な特徴として、(23)の例からも明らかのように、問題の「の」が (初出された2;4から2;7のはじめまで一貫して)

随意的に過剰生成されることがあげられる。すなわち、この段階の幼児は、限定的形容詞と名詞の間に、常に「の」を過剰生成するのではなく、(26)のように、「形容詞+名詞」の形をもつ「正しい」発話も、過剰生成の「の」を含む(27)の例と同時期に観察されるのである。

- (26) a. あっくん、ちいちゃい、こおき、みた (2;4)
 (=あっくんは小さい飛行機を見た)
 b. あっくん、このも、ちいちゃい、ちょっきん (2;5)
 (=あっくんは子供だから、小さな(おもちゃの)包丁を使う)
 c. まま、おとな、おっきい、ちょっきん (2;5)
 (=ママは大人だから、大きな(本物の)包丁を使う)
- (27) a. おっきい、*の、こんこん、あつた (2;4)
 (=大きいのがあつたはずだ、大きいスノーマンが、あつたはずだ)
 b. ぶうしゃん、おおきい、*の、かしゃ (2;5)
 (=クマのプーさんは、大きい傘をさしていた、傘を)
 c. おっきい、*の、みっきいちゃん、あつた (2;5)
 (=大きいのがあつた、ミッキーマウスがあつた)
 d. ちいちゃい、*の、ちゅっぱちゅっぱ、ない (2;5)
 (=小さいがない、汽車がない)
 e. あっくん、おっきい、*の、じゅうゆうべえ、じゅうゆうべえ、いや (2;5)
 (=あっくんは大きいのがいやだ、ジングルベルジングルベルと歌うクリスマスツリーが嫌だ)

このような「の」の過剰生成の随意性は、以下の観察からも強く裏付けられる。

(28) C: あっくん, ちいちゃい, *の, ぼおち (2;5)

(= あっくんは小さい帽子を持っている)

M: あるの?

C: ふん, おうち. ちいちゃい, ぼおち, おおきい, ぼおち (2;5)

(= うん, 家に. 小さな帽子と大きな帽子が)

(28)の最初の発話は、過剰生成の「の」を含み、2番目の発話では、「の」が入らない。同被験者から、同じ状況下で、両方の型の名詞句が引き出されるのである。

そして、この(第1期「の」)過剰生成が始まった段階では、永野(1960)の観察と同様、(29)のように[NP+属格+N]という名詞句内では、属格がいっさいあられない。(φは、大人の文法で義務的に挿入される位置に、属格がないことを意味する。)

(29) a. まま, φ てて (=ママの腕) (2;6)

b. あっくん, φ てて (=あっくんの腕) (2;6)

[NP+属格+N]の構造のもとで、「の」があらわれないことは、(30)のように、repetition taskによってひきだされた発話からも裏付けられる。M(実験者)が、属格を含む名詞句を被験者に繰り返させた場合、被験者(C)は「の」を脱落して産出する。

(30) M: ABC 中の S だね

C: ええびいちい, φ なか, φ えちゅ

3節でみるように「名詞句 (NP)+属格 (の)+名詞 (N)」の構造のもとで、

属格の「の」が挿入されるのは、2;4に過剰生成が始まってから2ヶ月後の2;6である。

したがって、第1期「の」過剰生成は、Cazdenの述べる「名詞句の独立属格形」([NPの])構造をもつ所有の意味の「の」と、代名詞(N)の「の」が獲得された直後に観察される。この獲得順序は、永野(1960)において報告された獲得順序と一致する。ここで得られた結果は、永野(1960)よりも明確な形で、(第1期の「の」)過剰生成が、[NPのN]の構造での属格の「の」の時期より早くあらわれることを示す。(31)=(11)のタイプの(第1期)過剰生成が観察されたのが2;4であり、(32)=(10)のタイプの名詞句内で属格がはじめて観察されたのは2;6である。

(31) a. きいろい*の はな

b. ほわし おおきい*の ほわし

c. あむな ちっちゃい*の あむな (永野 1960, 411)

(32) a. セーター, あむなの。 あむなの セーター。 あむなの セーター

b. パパの ぶとん

c. なに いれる? ようちえんの たまご? (永野 1960, 412)

つまり、永野(1960)では、[NPのN]の構造のもとで属格の「の」があらわれるようになる1ヶ月前に、そして、本研究では、2カ月前に、(第1期)過剰生成の「の」が観察されている。

2.2.3 第1期「の」過剰生成における文法特徴

以上、前小節では、第1期「の」過剰生成は、(限られた)形容詞にのみに随意的に過剰生成が見られる特徴をもち、その時期の幼児の文法は以下のようなものであることを報告した。

- (33) a. 「名詞句の独立属格形」([NP の]) 構造での所有の意味の「の」
 b. 代名詞(N)の「の」
 c. [NP+属格 (の)+N]の形で属格の「の」が現れない。
 d. 形容詞は1つの活用形のみしか使えない。

岩立(1997)の述べるように、幼児が形容詞や動詞を使い始める時期には1つの活用形のみしか使えず、時制や態に応じて活用を変えることはできないという特徴がある。第1期の過剰生成がみられる時期とは、未だ顕在的に多様な時制や態が、少なくとも形容詞の活用として観察されない時期であるといえる。また、この時期の文法獲得の特徴としては、「が」格などの格はあらわれないこともあげられる。

また、本研究では、この段階の顕著な発話特徴として、要素を繰り返す発話が多用されることが観察されている。(34)がその一例である。

- (34) a. あっくん、こえ、ちゆ、こえ (2:5)
 (=あっくんはこれをした、これを)
 b. あっくん、じゃぶじゃぶあ、おおちい、じゃぶじゃぶあ (2:5)
 (=あっくんはヨーグルトが欲しい、ヨーグルトが)
 c. ふた、ちょらい、ふた (=蓋を頂戴、蓋を) (2:5)
 d. まま、しゅっぽぼ、かいて、しゅっぽぼ (2:5)
 (=ママ、汽車の絵を描いて、汽車の)

この発話特徴は、(11b)や(11c)にみた永野(1960)の観察した過剰生成の記録にも共通してみられるものである。

3. 第2期「の」過剰生成

前節では、「の」の獲得順序と初期の過剰生成の特徴に関して、永野(1960)が裏付けられることを実証的に示した。一方で、本研究では、(第1期)「の」過剰生成がいったん終焉したと思われる後に、別種と思われる「の」の過剰生成が観察されている。第2期に過剰生成される「の」の文法範疇はなにか。この理論的問題を解決するための実証基盤として、本節では、第1期「の」過剰生成が終焉する過程と、「名詞句+属格形+名詞」の構造での属格の獲得、そして、第2期「の」過剰生成があらわれる過程について報告する。

3.1 属格の「の」と第1期「の」過剰生成の終焉

「名詞句+属格形+名詞」における属格「の」は、いつ、どのように獲得されるのか。既に言及したように、本研究でこの「の」が観察されたのは、2;6である。

- (35) a. あっくん、の、おちゃ (2:6)
 b. ばば、の、おちゃ、ない (2:6) (=パパのお茶じゃない)
 c. こおちゃん、の、しゅっぽぼ (2:6)
- (36) a. わんわん、の、わんわん、の、とけい (2:6)
 (=クマさんの、クマさんの時計)
 b. こえ、ばあにい、の、えよん、ない (2:6)
 (=これは、バーニーの絵本ではない)
 c. じいちゃん、の、みかん (2:6)
 (=おじいちゃんにもらったミカン)

2.2.2 節で詳細に述べたが、「名詞句+属格形+名詞」における属格「の」は、第1期「の」過剰生成が始まった時期には獲得されていない。名詞句の独立属格形や代名詞が2;3に、そして、第1期「の」過剰生成が2;4に初出する。そして、それに2ヶ月遅れて、「名詞句+属格形+名詞」の構文での「の」があらわれる。

1節でもみたように、日本語の属格の「の」には、所有の「の」(37a)、主語・目的語を示す「の」(37b-c)、修飾句に伴われる「の」(37d-e)がある。

(37) 属格の「の」

- a. 僕の本
- b. 野蛮人の侵入
- c. 都市の破壊
- d. 雨の日
- e. 母からの贈り物

興味深いことに、幼児の言語獲得の過程では、これらすべての「名詞句の属格形+名詞」の形において、属格の「の」が(正しく)義務的に挿入されるわけではない。(35)に見るように、所有に関する名詞句((37a)タイプ)については、2;6の段階で大人の文法と同様の属格挿入がみられ、属格の「の」が常に脱落せず現れた。ところが、同被験者においては、それ以外の属格の「の」は、(38)に示すように、随意的にあらわれる。

- (38) a. あっくん、ばば、の、ちゃっちゃっちゃっちゃっ、みたい (2;6)
 (=あっくんは、パパがサッサッと種を蒔くところを見たい)
- b. まま、こうやって、あっくん、の、まね、こうやって (2;6)
 (=ママ、こうやって、あっくんの真似して、こうやって)
 - c. ふうしゃん、の、おおん (2;6)

(=プーさんの写真が裏表紙になっている本)

- d. ふうしゃん、の、おおん (2;6)
 (=プーさんの写真が裏表紙になっている本)
- e. まま、こえ、の、おうた (2;6)
 (=ママ、この歌を歌って)
- f. まま、どぼっと、の、おうた (2;6)
 (=ママ、ロボットの歌を歌って)

この属格挿入の過剰生成は、長期に渡って(2;6-2;9)観察される。そして、重要な観察事実として、(大人の文法では、付与されるべき)属格の「の」が(随意的)過剰生成される2;6の時期に、(39)のような(大人の文法では、「の」が入ってはならない位置に)第1期の(随意的)過剰生成が、引き続き見られるのである。

- (39) a. もっと、ちいちゃい、*の、しゅっぼっぼ、あった (2;6)
 (=もっと小さな汽車があったはず)
- b. ちいちゃい、*の、ふおおく、あうない、ない、ない (2;6)
 (=小さいフォークなら、危なくない)
 - c. あかい、*の、ちょっきんちょっきん、ない (2;6)
 (=赤いハサミがない)
 - d. あっくん、あまい、*の、おしえんべえ (2;6)
 (=あっくんは甘い煎餅が欲しい)
 - e. ちゃう、*の、おちゃや (2;6)
 (=違うお皿がいい)

2.2 節で取り上げた2;4-2;5の過剰生成では、形容詞はすべて「おおきい」と「ちいちゃい」とに限られていたが、2;6には(39)のように「赤い」や「甘い」

なども現れる。このとき、時制や態に応じて形容詞を活用させることはできず、「赤い」「甘い」などの形容詞は、現在形以外の時制活用が観察されない。

そして、2;6 後半、第1期「の」過剰生成が減少しつつある時期、(40)のような「買った」を修飾句としてもつ（擬似）関係節を含む発話も観察されているが、奇妙なことに、その（擬似）関係節には、「の」がまったく過剰生成されない。

- (40) a. なんなんなあ、かった、おととと (2;6)
 (=お出かけして買った魚)
- b. なんなんなあ、かった、じゅうゆうべえ、びったんこ (2;6)
 (=お出かけして買った、ジングルベルのクリスマスケーキのシールは、どこだろう)
- c. なんなんなあ、かった、ぱん、おおちい (2;6)
 (=お出かけして買った、パンが欲しい)
- d. ぱば、かった、だんご、おおちい (2;6)
 (=パパが買ってくる団子が欲しい)

この時期は、時制が獲得されていない段階であると判断される。例えば、(40d)の動詞「買った」と(40d)内に示す意味との齟齬にも見られるように、動詞や形容詞は1つの活用形をもってのみ、あらわれる。また、この複合名詞句のように見える構造であられる動詞は、「買った」以外には、まったく観察されない。一見複合名詞句に見える(40)は、実は時制をもたない修飾句を含む擬似関係節であると思われる。

注意すべき点は、(40)のような構文では、まったく過剰生成は観察されないのにも関わらず、同時期に、形容詞の例では、随意的に第1期「の」過剰生成が続いていることである。2;4-2;5の(26)~(27)と同様に、2;6 後半でも、大人の文法と同じ「形容詞+名詞」という型の発話(41)と、過剰生成の「の」

を含む「形容詞+の+名詞」という型の発話(42)とが、同時期に観察されている。

- (41) a. じょおちゃん、あかい、ごとんごとん (2;6)
 (=象さんの絵が描いてある、赤い電車を見た)
- b. おおきい、たあこ、わ?なあい (2;6)
 (=大きい太鼓は?無いよ)
- c. こえ、おもい、かばしゃん、ぱく、ちた (2;6)
 (=これ、重いカバさんをバクッと食べたよ)
- d. あっくん、ちいちゃい、ぶうぶ、かけゆ (2;6)
 (=あっくんは、小さい車の絵を描く)
- e. ちいちゃい、じょおしゃん、おっきい、ない (2;6)
 (=小さい象さんは、大きくない)
- f. まあもい、ちゃあくゆ (=丸いサークル) (2;6)
- (42) a. ちいちゃい、*の、おちゃかな (=小さい魚) (2;6)
- b. おおきい、*の、おちゃかな (=大きい魚) (2;6)
- c. ちいちゃい、*の、じょおしゃん (=小さい象さん) (2;6)
- d. あかい、*の、まあく (=赤いマイク) (2;6)
- e. あかい、*の、しゅっぽぼ (=赤い汽車) (2;6)
- f. きえい、*の、ぱん (=きれいなパンが欲しい) (2;6)
- g. まま、ちいちゃい、*の、ぼおゆ、やって (2;6)
 (=ママ、小さいボールを投げて)

そして2;6 後半から2;7 のはじめには(42)のような第1期「の」過剰生成が減り、(41)のような「の」のない発話のみが観察されるようになる。「の」の過剰生成は終わったかのように見えた。

ところが、(40)が観察された後、しばらくたって、同被験者は「の」の過剰生成を再び始めたのである。2;6の時点では、(40)のように、一つの動詞（「買った」）のみについて、「の」の過剰生成がない（擬似）関係節を産出していた被験者が、一転して、2;7以降は(43)のように「買った」という動詞のみならず、それ以外の（時制をもった）修飾句と名詞との間に、生産的に、「誤った」「の」を過剰生成するようになる。

- (43) a. かった *の ケーキ (=買ったケーキ) (2;7)
 b. パパ, かった, *の, おちえんべい, おおちい (2;7)
 (=パパが買ってきた煎餅が欲しい)
 c. ペンギんちゃん, ちゅいてゆ, *の, かばん (2;9)
 (=ペンギンの絵がついている鞆)
 d. いま, ばば, が, いた, *の, おととと, どこ (2;10)
 (=今, パパが入れた観賞魚は, どこにいるの?)

次節では、第2期「の」過剰生成の特徴と、その時期の幼児の文法獲得段階について、論じる。

3.2 第2期「の」過剰生成と「が」格・時制の獲得

2;6終盤から2;7にかけて観察された第1期「の」過剰生成の終焉を打ち破るように、2;7中盤で、(43)のように、再び過剰生成が観察された。この時期は、所有以外の場合に、属格挿入が過剰生成される時期と重なる。すなわち、(在るべき構造下で)属格が過剰生成される一方で、時制をもった修飾句に(在ってはならない構造下で)「の」が過剰生成される。Murasugi (1991)においても、関係節や形容詞などを修飾句とする名詞句において、「の」が「誤って」過剰生成されるのと同時期に[PP+属格+N] (e.g., 東京からの電車)の

構造のもとで、「の」が過剰生成される事実を報告している。

- (44) a. サンタさんから ϕ プレゼント
 b. エミちゃんへ ϕ プレゼント
 c. トロントから ϕ 切符
 d. 山口から ϕ 電車
 e. サンタさんから ϕ お手紙

属格の過剰生成の時期におこる第2期の「の」の過剰生成には、(45)に繰り返す(43)に加えて、(46)のような例が観察される。

- (45) a. かった, *の, けえき (=買ったケーキ) (2;7)
 b. ばば, かった, *の, おちえんべえ, おおちい (2;7)
 (=パパが買ってきた煎餅が欲しい)
 c. ペンギんちゃん, ちゅいてゆ, *の, かばん (2;9)
 (=ペンギンの絵がついている鞆)
 d. いま, ばば, が, いた, *の, おととと, どこ (2;10)
 (=今, パパが入れた観賞魚は, どこにいるの?)
- (46) a. まま, あかい, *の, たおゆ (2;7)
 (=ママ, 赤いタオルで拭いてあげるね)
 b. かつこいい, *の, おしょや (2;7)
 (=格好いいヘリコプター)
 c. ちいちゃい, *の, ペンギんちゃん, じゃぶうん (2;7)
 (=小さいペンギンが, ザブーンと水に飛び込んで泳いでいる)

この時期の過剰生成は、第1期のそれとは異なる統語的特徴をもつ。それは、

(45)のような時制を伴った関係節(複合名詞句)が生産的にあらわれる点である。

では、(45)や(46)のような過剰生成が観察され始めた2;7は、どのような文法獲得段階として考えられるのか。まず第一に、この時期の被験者の主要な文法特徴として、文において「が」格を示すようになったことが挙げられる。厳密に言えば、2;6の終盤から、「こえ、が」(=これが)、「ここ、が」、「あっくん、が」など、母親の質問に答える形で「が」の産出が始まったが、文として「が」格が産出できるようになったのは、(47a)以外では2;7に入ってからである。

- (47) a. ぶうしゃん、が、みたい (=ブーさんのビデオが見たい) (2;6)
 b. あっくん、が、ちゃちゃちゃちゃ、ちゆ (2;7)
 (=あっくんが、調味料を入れる)
 c. まま、が、おようい、ちゆ (2;7)
 (ママが、料理をしている)
 d. あんよ、が、いたい。あんよ、が、いたい (2;7)

第二に「が」の獲得と連動するように、2;7には、形容詞において、現在形のみならず、過去形が一斉に産出された。また、この時期には、多くの動詞が時制や態の活用を多様に見せるようになった。

時制を表す接尾辞は、動詞や形容詞などに付加されることによって、時制を音声化する。「時制を音声化した動詞」がいつ頃獲得されたかを見定めるには慎重な配慮がいる。たとえば、「あっくん、きた」(=あっくんが来たよ)(2;0)や、「あっくん、きいんしゃん、みた」(=あっくんはキリンを見たことがある)(2;2)などは、日常生活で頻繁に使う語彙を、その統語的特性を獲得せずに使用している可能性が高い。一方、本研究は「時制を音声化した形容詞」が観察され始めた時期を明確に観察している。2;7になるまで、被験者は、

一語文の中でさえも、形容詞の過去形を使うことはなく、原形のみを用いていた。それが2;7になって初めて、(48)のように、形容詞の過去形を生産的に産出するようになった。

- (48) a. まま、こえ、あちゅかった (=ママ、ご飯が熱かったよ) (2;7)
 b. まま、おいちかった (2;7)
 c. こおちゃん、いなかった (2;7)

(48c)にみるような否定形は、この文法段階では、まだ獲得されているとはいえない。このとき、否定形生成については、大人の文法には至らず、「くらく、ない」「さむく、ない」などの(生産的な)否定形の初出については2;9を待たなくてはならない。しかし、第2期「の」過剰生成の時期は、明らかに、一般的な形容詞が時制を伴った時期である。

また、2;7には、動詞の過去形も生産的にあらわれる。「作る」という動詞を例にとってみよう。2;6から2;7はじめでは(49)のような発話が観察された。

- (49) a. あっくん、じんごう、いま、ちゆくゆ (2;6)
 (=あっくんは信号を今から作る)
 b. まま、こおちゃん、おふとん、ちゆくゆ (2;7)
 (=ママ、晃ちゃんのベッドを作って。！)
 c. ばば、こえ、ちゆくゆ (=パパがこれを作った) (2;7)
 d. あっくん、こえ、ちゆくゆ (=あっくんが、これを作った) (2;7)

「作る」の場合は、初出の形は現在形であるが、(49c-d)のように過去に作った物について述べていることは明らかな状況でも、現在形が使われている。この時点では「作った」という過去時制形は単独でも観察されたことがない。

(49c)は、「父親が歯科用の材料を利用して、おもちゃのパワーショベルのネジを作った」ことを意味するが、この時、被験者は、「買った」のではなく、「作った」のだ、ということ強調している。その背景には、過去に父親がその手作りのネジを家に持ち帰った折、被験者は、そのネジは、父親がお店で購入した物だと思ひこみ、「こえ、こおちゃん、の、かった、ばば」(=これを、晃ちゃんのために、買ってあげた、パパが)(2;6)、「ばば、こおちゃん、の、かった」(=パパが、晃ちゃんのおもちゃの車のネジを買った)(2;6)と発話した。その時、母親が、そのネジは「買った」物ではなく、父親が「作った」物であることを説明した。(49c)はこの状況を背景として産出された発話である。被験者は、当該のネジが過去に父親によって製造されたことは理解はしていても、2;7のはじめには、未だ過去時制を音声化することができず、「ちゅくゆ」と産出したものと考えられる。

ところが、その後、2;7の中盤から後半、「作る」は、活用を始める。「ちゅくって、ない」(=作ってない)(2;7)の「て形」や(50)のような過去時制が観察されるようになったのである。

- (50) a. まま、おおきい、の、ちゅくった (2;7)
 (=ママは、大きいのを作った)
- b. くちゅ、あいてえ、おんも、とことこ、やって、ちゅくった (2;7)
 (=靴を履いて、外に出て歩いていった空き地で、雪だるまを作った)

以上、2;7中盤の幼児において、「が」格と時制が顕在化される時期に、いったん終息を思わせた過剰生成が、再びあらわれた観察結果を報告した。この時期の「の」の過剰生成は、複合名詞句内の過剰生成、すなわち、第2期の「の」の過剰生成と考えられ、第1期の「の」の過剰生成とは区別されるべきものであろう。この結論が正しければ、本研究で観察された(「が」格付与や時制に関与する)INFLの投射が獲得された時期に「の」が過剰生成される事

実は、過剰生成の「の」が補文標識(Complementizer)であるとする Murasugi (1991)の分析と一致するものである。

4. 結論

本稿では、異なる文法範疇の「の」がいつ、どのように獲得されるのかについて、日本語を母語とする幼児1名を対象として縦断的実証研究を行なった。異なる統語範疇の「の」は、以下のような順序で獲得される。

- (51) a. 所有の意味をもつ「名詞句の独立属格形」の「の」
 (e.g., あっくんの)
- b. 代名詞(N)としての「の」(e.g., あかいの)
- c. 「名詞句の属格形+名詞」の構文における属格「の」
 (e.g., あっくんのしゅっぱっぱ)

更に、本論では「の」の過剰生成の時期が、2期存在する可能性を指摘した。第1期「の」過剰生成は、(51b)の直後の2;4に、一つの活用(現在時制形)をもつ語彙的に限られた形容詞(「おおきい」「ちいちゃい」等)において観察される。第1期の「の」の過剰生成が始まるまでの「の」の獲得順序は、永野(1960)の観察結果と経験的に一致する。また、代名詞の「の」と過剰生成があらわれる時期の時間的間隔も、先行研究を裏付ける。代名詞(N)としての「の」が獲得された後に過剰生成の「の」が観察されるが、その間隔について、永野(1960)では同じ月齢内、横山(1990)では1ヶ月後、そして、本研究の被験者においては1週間後に(第1期の)過剰生成の「の」があらわれる。

本稿では更にこの過剰生成が、属格挿入が始まってもお、引き続き観察され、第1期の過剰生成は2;6から2;7にかけて終焉することを示した。その

時期にひきだされた（時制をもたない（擬似））関係節には、いっさい「の」が過剰生成されていない。

一方、(51c)の属格が過剰生成され、文においては、「が」格があらわれ、そして、形容詞や動詞が複数の時制活用を示すようになる時期と一致して、2;7 中盤に、再び過剰生成がおきる。このときの過剰生成は、時制を含む修飾句に「の」が過剰に後続する。

本研究が従来の研究に対してもつ第一の意義は、「の」の過剰生成には2種類あるとする仮説を提案する点にある。横山（1990）、村杉（1998）などで、「の」過剰生成には2期あるとする可能性は既に指摘されているが、本稿は、その仮説について、実証的な裏付けを与えるものである。1節で述べたように、Murasugi（1991）の提案した、過剰生成の「の」は補文標識であるとする分析への批判のひとつとして、過剰生成を行なう幼児の使用する形容詞に時制がみられない、という実証的報告がある（伊藤 1993）。これに対して、本研究は、この批判が正しいものではないことを示している。2;7 以降に見られた過剰生成は、明白な形で時制が獲得されている時期のものである。

伊藤（1993）は、更に、過剰生成される「の」は属格であると主張しているが、その分析は、少なくとも、言語獲得中期から後期の「の」の過剰生成に関しては正しいものでない。その根拠は、Murasugi（1991）の議論から、既に明らかである。Murasugi（1991）は、韓国語の大人の文法で、属格はuy、そして、代名詞と補文標識はka (*kes*)であらわれるが、韓国語を母語とする幼児が、言語獲得の段階で、kaを過剰生成するとする Kim（1987）の報告に言及している。

- (52) Aecessi otopai tha-nun *ka soli-ya
uncle motorcycle ride Pres Comp sound be
((This) is the sound that a man is riding a motorcycle.)

(Kim 1987, 90)

そして、同様に、富山方言では、属格は「の」（知子の本）、そして、代名詞や補文標識は「が」（赤いが、ロブスター食べたがはボストンでだ）であらわれるが、富山方言話者の幼児が「が」を過剰生成することを実証報告している。

- (53) a. あかい*が帽子

- b. アンバンマンついとる *が コップ (2;11)

(Murasugi 1991, 178)

したがって、少なくとも、このとき過剰生成される要素は、属格ではない。

しかしながら、一方で、伊藤（1993）をはじめとした、Murasugi（1991）への批判は、本研究において観察された第1期の過剰生成の時期の特徴と一致するように思われる。本研究においても、第1期の過剰生成の時期には、時制が獲得されていないと考える。その意味で、Murasugi（1991）への諸批判は、第1期の過剰生成に関する観察として捉え直される可能性がある。もし、この仮説が正しいければ、従来の「の」の過剰生成に関する紛糾の一部は、異なる文法範疇が同一の音声表示（「の」）をもって現れるが故に、本来区別されて考えられるべき統語現象が、混同して議論されたことに起因することになる。

第二に、ここで観察した2つの種類の「の」の過剰生成の過程には共通点があり、この共通点は、過剰生成の一般的特性を考える上で意味を持つ。一般的に過剰生成はU字形をなすものが多い。「第一段階では（一見）大人と同じ形式を持つ文法要素が、なんらかの理由により文法獲得の中間段階で過剰生成をおこし、その後、大人の文法に至る」という過剰生成の過程が、アルファベットの「U」の字に例えられる。本研究では、このU字形過剰生成のパターンが、2つの過剰生成のいずれもにおいて、明確に観察されている。第

橋本 知子・村杉 恵子

1期(22)においても、第2期(42)においても、過剰生成の「の」が見られる前に、(一見)大人と同じ形式をもった名詞句が観察される。そして、いずれの場合も、過剰生成前の「(一見)大人と同じ形式」は、語彙的に限られるという特徴をもつ。第1期においては、「おおきい」「ちいちゃい」などの形容詞に限られ、第2期においては、「買った」という動詞のみに「(一見)大人と同じ形式」が見られるのである。

U字形の始まりと終わりは同質ではないことを示す観察結果は、過剰生成の一般理論を支える重要なデータとなる。そして、2期にわたる過剰生成において、共通する性質を担うU字形過剰生成のパターンが観察されたことは、2つの「の」の過剰生成が、異なる統語的理由に基づくものであるとする本稿の結論を、より強く裏付けるように思われる。

[附記]

本研究は、執筆者の一人である橋本知子の実息「あっくん」を被験者とした実証研究である。本稿を纏めるにあたり、斎藤衛氏から、貴重な示唆を得た。ここに深く感謝する。

本研究は、南山大学パッヘIA(特別研究助成)、及び文部省科学研究費補助金(基盤研究(C))により援助を受けている。ここに記して感謝する。

参考文献

- Cazden, Courtney. 1968. The acquisition of noun and verb inflections. *Child Development* 39:433-38.
- Clancy, Patricia M. 1985. The acquisition of Japanese. In *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*, vol. 1, ed. D. I. Slobin, pp. 373-524. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

- 伊藤友彦 1993 「幼児における「ノ」の過剰生成」 *Kansai Linguistic Society* 13: 118-26.
- 岩立志津夫 1997 「文法の獲得(1)」 小林春美・佐々木正人編 『子どもたちの言語獲得』, pp. 112-30. 大修館書店。
- 岩淵悦太郎, 波多野完治, 内藤寿七郎, 切替一郎, 時実利彦 1968 『ことばの誕生—うぶ声から5歳まで』 日本放送出版協会。
- Kim, Young-Joo. 1987. The acquisition of relative clauses in English and Korean: Development in spontaneous production. Ph.D. dissertation, Harvard University.
- Murasugi, Keiko. 1991. Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- 村杉恵子 1998 「言語(獲得)理論と方言研究」 『アカデミア』 文学・語学編 65:227-59.
- 永野賢 1960 「幼児の言語発達——とくに助詞「の」の習得過程について——」 『関西大学国文学会：島田教授古希記念国文学論集』, pp. 405-18.
- 大久保愛 1967 『幼児言語の発達』 東京堂出版。
- 奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』 大修館書店。
- Radford, Andrew. 1990. *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Oxford: Basil Blackwell.
- 横山正幸 1990 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」 『発達心理学研究』 1(1):2-9.